昭和六十四年一月一日発行（毎月一日発行）三百号
発行／黒埼町役場　〒950-21　新潟県西蒲原郡黒埼町大野二四四十一
電話／〇二五七-八二-三三〇　編集／企画開発課（担当：広報統計課）　印刷／㈱旭光社
経費／部四円

人 57 女であることはとても幸運

松本三江子さん

東京（下山田出身）二十七歳

二十代の女性の理想的ライフスタイル、それは例えば「二十五、六で結婚して、夫は仕事ができ、生活能力がある。自分はクリエイティブな仕事をしていたい。子供は一人ぐらいほしいわね」なんていうものか。住んでる所は、当然「都市」でなければならないだろう。

さしずめ東京の松本三江子さんの暮らしがそうか。職業はイラストレーター、海外出張の多い夫とかわいい赤ちゃんがいる。「よく言われるんです。あなたはいいわねって」という松本さんは、童話や児童向け図書の表紙やさし絵を描いている。マッチ売りの少女などもう三十冊近くになった。「やりたい仕事ができて幸せだとは思います」

満足はしていない。「中途半端なんです。仕事も家事も育児も。これからどうしようかな、という不安もありますしね」昨年の二月初子を出産し、下山田の実家へよく帰っていた。祖母の若林キヨさんは話す。「子供のときから絵は上手だったけど、まさか本の絵を描くとは思わなかった。好きなことができて幸せらくて」

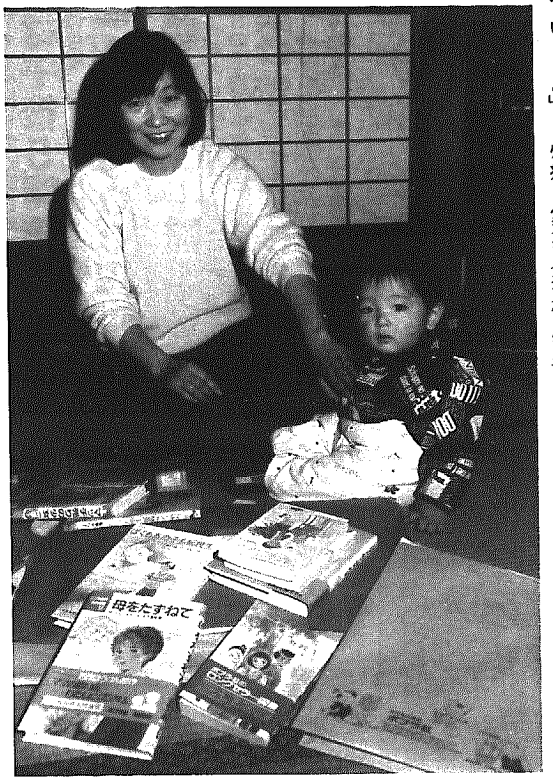
小さいころ、マンガ家か歌のお姉さんになろうと思っていたという松本さん。大学は東京の美大。人形劇のサークルと絵本のゼミに入った。「でも卒業したら普通のOLになろうと思っていたんですよ」と帰郷。家業（若林農園）を手伝いながら、一年半絵を描いていた。絵を持って東京の出版社を回っていたら注文を受け再び上京。

「とりあえず描かせてあげようという感じだったんです。ラッキーだったと思います。やっぱり、イラストレーターになりたかったし。悲壮感はなかったですけどね。女は最後は嫁に行けばいい、永久就職できますもの」

現在は育児に追われ、仕事の方はひと休み。「子供はほしかったんです。子供の絵を描いてますからね。だんだん大きくなってきてすごく楽しみです。生活の中からいろいろな絵を描いていきたいと思います」

生き方は人それぞれだし、幸福とか価値とかはその人が決めることだ。だれかに教えられたり本やテレビで知るものではないだろう。

「絵も趣味でなくて仕事だと厳しいんです。不安や悩みも多いんです。自分に自然に生きるしかないですね。それに、女であることはとても幸運だったと思います。好きなことをしていられますものね」



イラストレーターの松本さん。実家で長男の航平ちゃんと。手前の本は松本さんが表紙やさし絵を描いたもの。もうすぐ読んで聞かせられるだろう。武蔵野美術大学卒、昭和36年生まれ。

ほんの一冊

三国志

横山光輝（潮出版社）

ほんの一冊の紹介が何と60冊と言ったら、お叱りを受けるでしょうか。

今から約1800年ほど前の中国で、魏・呉・蜀が争っていた三国時代のロマンあふれる劇画です。

広大な中国を舞台に、数多くの武将たちが夢と勇気を、義と忠を貫き、目的に向って邁進する様は圧巻です。しかし、夢とははかないもの、勇気も義も忠も表裏であるという哀しさ、寂しさ……そんな人間の弱さも感じられ心にしみます。

日本でも愛読されている本ですが、今やファミコンのソフトまで登場。コミックになったら動きが出てきて親しみが感じられ、気楽に楽しめます。

何回読み返してもあきるということがありません。　（紹介者・大谷定子）

〈人の動き〉

11月末現在（前月比）		〔前年同月比〕
人口	23,097（－5）	〔+287〕
男	11,361（－4）	〔+128〕
女	11,736（－1）	〔+159〕
世帯	6,117（＋3）	〔+121〕

11月1日～末日

出生	21	転入	52
婚姻	14	転出	66
死亡	11		

今年も町政へのご意見ご要望を待っています。

下水道、観光、福祉などを取り上げる予定です。それらに関係するアンケートをまとめています。

編集室

この編集室を書いているのはまだ昭和63年である。新年になる前に、いや、新しい年を迎えても、昭和63年という年を考えているだろう。「いったいどういう一年間だったのか」リクルート、消費税、天皇、この三つが63年、あるいは続く昭和64年のキイワードだろう。▼自分の思っていることをそのまま言えるということはいいことだ、と若者の座談会で思った。そして、そのまま活字にできることもよいことだ。最近の新聞やテレビを見ると、そう感じる。▼フランスの地理の教科書だったかに「汚れていると感じる風景のもとでは環境もおびやかされている」という一節がある。わが町の風景はどうだろうか。今月号にきれいな絵ハガキを付けてみた。もうちょっと違うのにすればよかったろうか。▼ある雑誌の編集長は「編集に似ているものは映画づくりと恋愛である」と言っている。映画はわかるが恋愛はどうか。疑問な点がなくはない▼「二兎を追うものは一兎もえない」ということわざよりも「三兎を追わなければ一兎もえない」というセリフが好きだ。▼忘れてはいけないことはたくさんある。特に昭和63年は記憶にとどめておきたい。あたりまえのことだが、新年は63年の続きである。よく考えなければならない。▼久々に編集室を書いたら、2時間もかかった。年賀状の下書きにはならんな。▼今年も皆さまのご愛読を切に願っております。（Ｉｇ）